

#### N. ゲーゼ：クラリネットとピアノのための4つの幻想曲

ニルス・ゲーゼは、19世紀デンマークの作曲家。メンデルスゾーンに認められ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者としても活動した。幻想曲とは、決まった形式を持たず、楽想の自由な羽ばたきを表現するもの。クラリネットとピアノによる幻想小曲集と言え、シューマンの作品73（1849）が想起されるが、本曲（1864）もシューマンの作品を意識して書かれているのだろう。4楽章構成で、ドイツ・ロマン派の影響が濃厚に感じられ、甘美な旋律と民謡のような素朴さが随所に顔を覗かせる。

#### L. スキアーヴォ：アルバムの3葉のしおり

フルート奏者で音楽学者でもあるレオナルド・スキアーヴォは、イタリアの気鋭の作曲家。クラリネットのために書かれた本曲は昨年、世界初演されたばかりで、日本では今回が初演となる。作曲者の言によれば、「世の全ての葉に捧げるこの小曲のタイトルは、イタリア語のFogli（小品）とFoglie（葉）の語呂遊び。1楽章および3楽章は、リズムカルで力強く、歓喜に満ちたもので、葉の色と光を表わす。ゆったりとした2楽章は、美をイメージしている」とのこと。

#### ブラームス：クラリネット・ソナタ 第2番

ブラームスはその晩年、名クラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルトの演奏から強いインスピレーションを受け、クラリネットの名曲を立て続けに発表した。なかでも1894年に作られた2曲のクラリネット・ソナタは、ブラームスにとって最後のソナタとなった。この第2番は、終始穏やかな表情を持っている。優美な主題で始まる第1楽章は温かさと優しさに満ちている。第2楽章はスケルツォに近い間奏曲で、哀愁漂う旋律が奏でられる。第3楽章はブラームスが得意とした変奏曲形式で、抒情的な主題に5つの変奏が続く。

#### A. テンプルトン：ポケット・サイズ・ソナタ 第1番

生まれながらにして全盲だったが、絶対音感を持ち、すでに5歳で作曲を始めたという神童アレック・テンブルトンは、イギリス出身の作曲家・ピアニスト。26歳でアメリカに渡り、テレビやラジオでも活躍した。本曲はジャズ風のお洒落な作品で、タイトルの通りコンパクトな3つの楽章が並ぶ。特に第3楽章「イン・リズム」は、不思議なメロディ・ラインが印象的。

#### C. スタンフォード：3つの間奏曲

サー・チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォードは、アイルランド・ダブリンの裕福な家庭に生まれた作曲家・教育者。彼の門下からは、ホルストやヴォーン・ウィリアムズなど高名な作曲家が輩出されている。3つの間奏曲からなる本作は、1880年に作曲された。全曲を通じて、その根底には深い憂愁が湛えられているが、優しい楽想によって時に慰められ、時に鼓舞される。クラリネットの繊細で柔ら

かな音色を効果的に引き出した作品と言える。

#### **マルティヌー：クラリネットとピアノのためのソナティナ**

チェコ出身のボフスラフ・マルティヌーは非常に多産な作曲家で、生涯の作品数は400曲近くにもものぼる。ジャンルも交響曲からオペラまで多岐にわたり、室内楽にも多くの作品を残している。マルティヌー晩年の1956年に作曲された本曲は、3楽章からなり、華やかなモダンさを持っている。特にクラリネットとピアノとの掛け合いが楽しい曲である。

#### **A. ローゼンブラート：カルメン幻想曲**

アレクサンドル・ローゼンブラートは、ユダヤ系ロシア人の作曲家。生地モスクワを拠点に活動しており、クラリネットとピアノのための本曲は1994年の作曲。ローゼンブラートの作品は、エンターテインメント性を有し、ジャンルを越えた音楽語法を駆使することでも知られる。本曲もジャズの語法を取り入れた自在な編曲により、従来の「カルメン幻想曲」のなかでも異色の作品となっている。